

〔曲名〕 Sinfonia in Do Maggiore

ハ長調シンフォニー 第二十一番

Grave.Allegro e con imperio

Grave

Allegro

〔曲種〕

〔作曲者〕 L.Boccherini

ルイジ ボッケリーニ

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

作者ボッケリーニは音楽の基礎教育を生地ルッカで父とヴァンヌッチ（1793－1885）から受け更にローマで学んだ後、

タルティーニ門下のマンフレディ（1729－1777）と共にヨーロッパを遍く演奏旅行、各地で華々しい歓迎を受け流行児となつた。

パリー在住のスペイン大使はマドリッド訪問を懇請し、1768年此の地に赴いてルイス王の後援を仰いだ。

又プロシア王ウィルヘルム二世に奉仕する作曲家として任命され年俸を支給されたが、

1797年王の崩去によって年俸は絶たれ、新たにペナヴェンテ侯爵の後援者を得た。

このペナヴェンテ侯爵と云うのが非常なギター愛好家で、

この人の要望でボッケリーニはギターを学び且つギターを含む多くの室内楽を書くことになるのであるが、

本曲ハ長調のシンフォニーは1771年に書かれた弦楽五重奏曲を新たに作者自身によって1798年頃下記の編成によって書き改められた。

二つの主奏ヴァイオリン、二部の斉奏ヴァイオリン、ギター、ヴィオラ、ヴィオロンチェロ、ダブルバ

ス、

二つのオーボエ、二つのホルン、ファゴット。

本曲はこの形では未出版のもので過日横浜の小船幸次郎氏が手写譜のコピーを入手され、その写しを譲り受けたのでマンドリンオーケストラでやってみたくなり急拠とりかかった。

元より原編成の味とは随分異なるものとなるが、ギターパートは其の儘とした。

斯うした形のものはマンドリン畑では皆無に等しいので之によって大きな示唆が与えられるものと期待している。

よきにつけ悪しきにつけ。私は編曲を試みながらボッケリーニが奔流の如く湧き出る楽才に驚歎して筆を進めたが、

原曲が作曲される速度は私などが編曲するよりずっと速かったのではないかと云う気がする。

編成はA群とB群に分かれA群は多人数を要しコンサートマスターはA群の第一マンドリン主奏者としB群は一人づつとする。

ギターは主奏者は4人程とし他は斉奏部な担当する。

配列については実際の効果を確認してからでないとは決定しかねる。

作者が優れたチェロ奏者であるので原曲ではチェロの活躍が烈しいが、編曲に当ってはマンドラに担当して貰った部分が可なりある。

マンドリンオーケストラではロマン以後の作者に占められているので斯うしたものが厳格に演奏された場合

の効果を試してみたい。

猶表紙絵は①はハンガリアの田舎娘。

②は十八世紀挿画家としてヨーロッパに名を馳せたシュワントナーの装飾画で一筆で描かれてある。

楽器な演奏しているエッチングはボッケリーニがスペインに行く十数年前マドリッドで出版された楽器解説書の口絵。

1972年7月28日発行

マンドリン古典合奏曲集第2集より

